念仏往生の大地に生きる

高　史明

目

次

表紙デザイン　浜口彰子

念仏往生の大地に生きる

■「おかあー、南無阿弥陀仏だぞ」……2
■お念仏の教えが見失われている……14
■タダ弥陀ヲタノム……25
■見失われた南無阿弥陀仏……38
■お念仏とともにいただく仏の声……45
■仏たすけたまえとは思うべからず……51
■はじめて開かれてくる阿弥陀の世界……62
あとがき……74

念仏往生の大地に生きる

「おかあー、南無阿弥陀仏だぞ」

みなさんの蓮如上人五百回忌の法要が、札幌別院総合整備事業竣工の落慶の喜びと併せて、ここにその大法要が執り行われると聞きました。本当におめでたいご縁でございます。そのような大事な、考えれば考えるほど大事に思える場に、こうしてご縁を頂戴することになりました。有り難うございます。

日本語に「一期一会」という言葉がありました。生涯にただ一度きりのご縁を意味する言葉であります。私たち人間中心に考えましても、本日はその大切なご縁の場であると言えます。しかも、そのうえ、本日は阿弥陀さま、親鸞聖人、蓮如上人に見つめられてのこのお御堂のご縁であります。「往相即還相」という教えがありました。念仏者の往生は、

即、還ってくる「いのち」のはたらきに包まれているのでありました。今日の「一期一会」はまさに、阿弥陀さま、親鸞聖人、蓮如上人に見つめられての得難い場であります。そのご縁をこうしていただけているこの身が、大変有り難く思えます。

思えば、二十一世紀に入りまして、時代はいよいよ難しい状況になっているのでした。何が始まろうとしているのか、と思えるほど八方塞がりであります。このような状況を真っ直ぐに見据えて、いまここに親鸞聖人の教えをしっかりいただきたいと考えます。今日、浄土真宗の「お念仏ただ一つ」の真実の教えは、みなさんにとって大事であるのは当然としましても、アジアや世界の平和ということを考えましても、まことに深い二十一世紀の時代全体に関わる大事な、大事な教えであります。

とはいえ、その「お念仏」の教えが、私たちの現実世界では極めて不透明になっているのが、今日の現実であります。みなさまは、「念仏」と聞くと、咄嗟に何を思い浮かべられましょうか。

先だって私は、新潟県の方にご縁を頂戴して参りました。そのときに、「講題を何にするか」と尋ねられ、申しあげましたのは、「おかあー、南無阿弥陀仏だぞ」でした。驚いたと言われました。あまりにも直截だというわけであります。しかし、いま真っ直ぐに見つめていいのは、まさに「お念仏」ではないでしょうか。私は今年になって、その「お念仏」の得難い縁を、ある浄土真宗の若いご住職さんに教えられたのでした。少しばかりフィクションも交えながら、その間の経緯をまず申しあげたいと思います。

そのお坊さまは、若いときには随分と親不孝だったようでございます。その方のお母さまのお話であります。お坊さまが京都の大学で学ばれていたときのことです。京都から、「何々先生の本を買うから、金を送ってほしい」と、度々そのような要求がきたそうです。お母さまは、そのお手紙を喜ばれました。いまどき難しい仏教の先生の本を買うからという手紙ほど、親にとって嬉しいことはないのでありましょう。大いに期待して、そのつど、送ったそうですが、後で気づきましたら、そのお金がみんな飲み代に化けていたわけです。本当に親泣かせだったようでございます。

しかし、ここに仏縁の不思議があります。耆婆（インド・マガダ国の大臣）が親殺しの罪悪に慄く阿闍世（マガダ国の王）に向かって、仏の

慈悲を説く言葉が『教行信証』にありました。

たとえば一人して七子あらん。この七子の中に、（一子）病に遇えば、父母の心平等ならざるにあらざれども、しかるに病子において心すなわち偏に重きがごとし。大王、如来もまた爾なり。もろもろの衆生において平等ならざるにあらざれども、しかるに罪者において心すなわち偏に重し。放逸の者において仏すなわち慈念したまう。不放逸の者は心すなわち放捨す。

（真宗聖典二六〇頁・東本願寺出版部）

と。

そのお坊さまは親泣かせでしたが、それだけ母親に思われ、仏さまに見つめられていたのでありましょう。その仏の慈悲が、お母さまが亡くなられるとき、いっきにお坊さまの心身に甦ってくるのであります。今年の初め、そのご住職が、お母さまの臨終の間際の一夜を仔細に記したお手紙をくださいました。そのお手紙の言葉をここに、まず読んでみたいと思います。それを扉として、いよいよ闇を深めつつある現代のただ中に足を進め入れ、親鸞聖人の教えをみなさんと共にいただいてゆきたいと考えるのであります。まず、お手紙の声であります。

さる一月十一日、午前六時ごろ、静かに母がお浄土に往きました。十年間でC型肝炎→肝硬変→肝臓ガン→肝不全→多臓器不全という一連の流れの病気を縁としてのことでした。十日の朝、自宅で軽い昏睡に陥り、病院へ。直ちに連れて帰り、家で末期をと医者に言い

ましたが、血圧が低下しているため、もう保たないと。
病院ではあるが、みんなに看取られていける環境を作ってもらい、最後の心臓マッサージや管を通すことは一切しないと話し合ってのことでした。点滴などにより、意識が少し回復し、うわごとを言うようになり、「ああーしんど、ああーしんど」と繰り返すようになりました。
私が、「おかあー、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏やで」と声をかける。嫁が「待ってはるよ、待ってはるよ」という。
しかし、母は「あーしんど」という言葉ばかり。
もう外は暗くなってきて、あまり言葉も聞き取れなくなってきてからのことでした。「素晴らしい、素晴らしい」と、母が繰り返し言

い出しました。
手を握りますと、今まで手を握ると、弱い力で返していたのに、全く力が入ってない。手をさすっても力みがない。
「おかあー、仏様に出遇ったんか」と言っても、ただ「素晴らしい、素晴らしい」を繰り返す。
私も溢れる涙で返す言葉もなく、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言う。
そのうち、「ゆるして、ゆるして」と繰り返す。私たちに言っているようには聞こえなかった。
「帰命無量寿如来、帰命無量寿如来」と繰り返し出す。
「みんな居る、みんな居る」と言い出す。しばらくして、「あーしん

ど、あーしんど」とまた戻って言い出す。
これからは手を握っても力を入れなくなって、何かを掴もうともしなくなりました。
それからどれくらい時間が経ったかわかりませんが、ますます言葉が聞き取れなくなってきました。でも、「あーしんど、あーしんど」は休みなく言っています。
聞き取りにくい中、「ありがとう、ありがとう」と言っているように聞こえる時がありました。
夜中十二時、私は、私の子供たちは、もう帰すことにし、また明日午前中に来ることとしました。それから、ますます聞き取りにくくなってきました。

「おかあー、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声をかけますと、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と返ってきます。
一時を過ぎ、完全に聞き取れなくなり、吐く息はすべてうめき声になりました。
朝五時ごろ、看護婦さんが血圧を測りますと、下が二十八に低下。
「皆さん、手を握って声をかけてください」と言われました。「おかあー、おかあー、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声をかけながら、五時半ごろ、母が大きく目を開きました。
息も間隔が開き始め薄くなり、心臓もあまり打たなくなり、「ふうー」と声を出しながら吐いた息が最後でした。
母が私に対して最後に説法をしてくれたように思いました。